

本稿提出後、小嶋篤氏により宗像型石室に関する新たな論考が発表された（小嶋篤 2022「宗像型横穴式石室墳の研究」『九州歴史資料館 研究論集』47）。本稿では墳丘と墓壇も検討内容に加えてはいるものの、実態は墳丘・墓壇・石室構築の概括的な分類で、墳丘構築技術の詳細な検討はできなかった。これに対して小嶋氏はこれまで携わった調査所見を宗像地域にフィードバックさせ過去の調査を詳細に分析している。筆者の能力上、ここまでの検討は現状無理なので、氏の論考を参照されたい。

（おおたさとし 原始・古代部会）

- 安部裕久 1985 「3. まとめ」『城ヶ谷古墳群Ⅱ』宗像市文化財調査報告書第8集 宗像市教育委員会
- 池ノ上宏 2011 「V. まとめ」『津屋崎古墳群Ⅱ』福津市文化財調査報告書第4集 福津市教育委員会
- 太田宏明 2016 『横穴式石室と古墳時代社会』雄山閣
- 大谷晃二 2017 「山陰・北陸一出雲地方を中心に」『一般社団法人日本考古学協会 2017 年度宮崎大会研究発表資料集』日本考古学協会 2017 年度宮崎大会実行委員会
- 蒲原宏行 1983 「堅穴系横口式石室考」『古墳文化の新視角』古墳文化研究会編 雄山閣
- 小嶋篤 2009 「1 節 長者の隈古墳石室の検討」『長者の隈古墳』福岡大学考古学研究室研究報告 8 福岡大学考古学研究室
- 小嶋篤 2012 「墓制と領域―胸肩君一族の足跡―」『九州歴史資料館研究論集』37 九州歴史資料館
- 小嶋篤 2015 「古墳時代後期の埋葬施設と墳丘」『古墳時代の地域間交流 3』九州前方後円墳研究会
- 佐田茂・池ノ上宏・安武千里 1999 「第3節 勝浦地区の古墳群」『津屋崎町史』通史編 津屋崎町史編さん委員会
- 重藤輝行 1992 「北部九州の初期横穴式石室にみられる階層性とその背景」『九州考古学』第67号 九州考古学会
- 重藤輝行 1999 「北部九州における横穴式石室の展開」『九州における横穴式石室の導入と展開』九州前方後円墳研究会
- 重藤輝行 2016 「古墳の埋葬施設の階層性と地域間関係」『考古学は科学か 田中良之先生追悼論文集』田中良之先生追悼論文集編集委員会編 中国書店
- 重藤輝行 2020 「九州における横穴式石室の展開」『横穴式石室の研究』土生田純之編 同成社
- 田村悟 1999 「6・7 世紀における大型横穴式石室の地域性」『九州における横穴式石室の導入と展開』九州前方後円墳研究会
- 豊崎晃史 2020 「2. 古墳群の時期」『稲元古墳群』宗像市文化財調査報告書第81集 宗像市教育委員会
- 花田勝広 1991 「筑紫宗像氏と首長権」『地域相研究』第20号上巻 地域相研究会
- 濱口真衣 2014 「油山山麓における堅穴系横口式石室の展開と基盤集落」『七隈史学』第16号 七隈史学会
- 原俊一 1982 「V. まとめ」『浦谷古墳群Ⅰ』宗像市文化財調査報告書第5集 宗像市教育委員会
- 福岡県教育委員会 1977 『新原・奴山古墳群』福岡県文化財調査報告書第54集
- 森下浩行 1986 「日本における横穴式石室の出現とその系譜―畿内型と九州型―」『古代学研究』第111号 古代学研究会
- 柳沢一男 1982 「堅穴系横口式石室再考」『古文化論集 森貞次郎先生古稀記念』森貞次郎先生古稀記念論文集刊行会

奉仕を介した（重藤 2016）首長墓から中小古墳の技術共有が見られるが、逆のパターンはまだなく、実態は首長→中小古墳への技術導入の様相が強い。

一方の后者はⅢ-1 類の「技術的属性」のうち、袖部にⅡ-2・Ⅱ-3 類の影響が、逆に前壁の形成や平面形態の拡大には首長墓の影響がみえ、各階層で固有の技術的属性を統合させてⅢ-1 類が出現すると考えられる。この場合、首長墓⇄中小古墳の双方向的な技術の流れへと変化している。したがって、Ⅲ-1 類を発展させた宗像型石室（Ⅲ-2 類）とは、「意匠的属性」は首長墓に基づきつつ、「技術的属性」は首長墓と中小古墳の両者を統合させて創出させた地域型式と考えられる。

6. まとめ

本稿では、古墳時代後期における宗像地域の地域型式である「宗像型石室」の成立過程を探るため、中期～後期中ごろの石室・墳丘の検討を行った。

- ①検討では意匠的属性と技術的属性に分け、さらに墳丘・墓壙も加えて検討した結果、石室は3種6分類でき、それぞれ漸次的に変化する。
- ②TK216～47型式期では、首長墓専用であるⅠ類と、中小古墳のⅡ-1～3類が築造されるが、両者には各属性で大きな隔たりがあり、階層差に規定されて石室や墳丘の技術的属性も変化する。
- ③また、中小古墳による横穴式石室の導入に際しては、立柱石構造などに首長墓からの技術導入が想定されるが、中小古墳から首長墓への流れは確認できず、この時期一方通行的なものだった。
- ④ところがMT15型式期以降では、首長墓⇄中小古墳の双方向的な技術共有へとかわる。
- ⑤この双方向的な技術共有の流れの中で、各階層で醸成させ保持した各属性を統合させて宗像型石室の前身であるⅢ-1類を創出し、Ⅲ-2類へと発展させ、階層を問わず普及し始める。

一方、宗像地域の最上級の首長墓域である新原・奴山古墳群の様相が断片的な以上、本論も空中戦の感を否めない。ただ、もともと古墳時代中期の石室は残りが悪いものが多く、ほかの地域では資料数が不足しているため、本稿のような検討は難しい。宗像地域における技術共有と地域型式の成立過程が他地域にそのまま適用できるかは不明である以上、一つのモデルケースにとらえていただければ幸いである。

参考文献

※報告書については表1を参照

青木敬 2012 「墳丘企画・築造法」『古墳時代研究の現状と課題』上 同成社

青木敬 2018 「前・中期における墳丘の諸問題」『日韓交渉の考古学—古墳時代—（最終報告書論考編）』日韓交渉の考古学—古墳時代—研究会

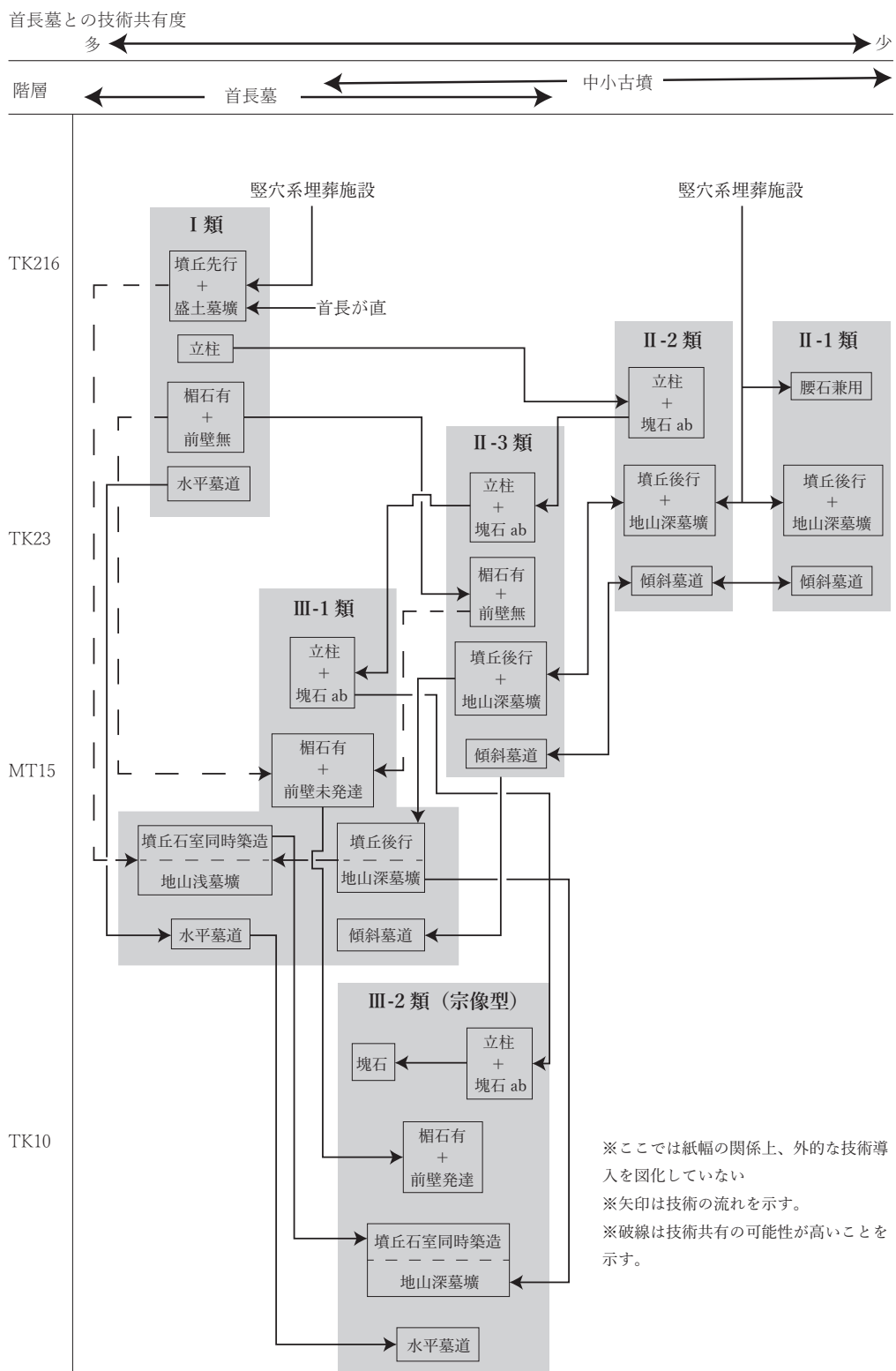


図 10 宗像地域における石室の各技術系統

これらと異なるのがⅢ-1類とⅢ-2類で、石室長に違いはあるが、前代に比べて縦横比が1.5～2.0に収斂し定型化した様子を示し、平面の縦横比は前代のⅠ類のTK23型式期以後の状況がわからないため即断できないが、両者はこうした首長墓の平面プランの影響が強い。

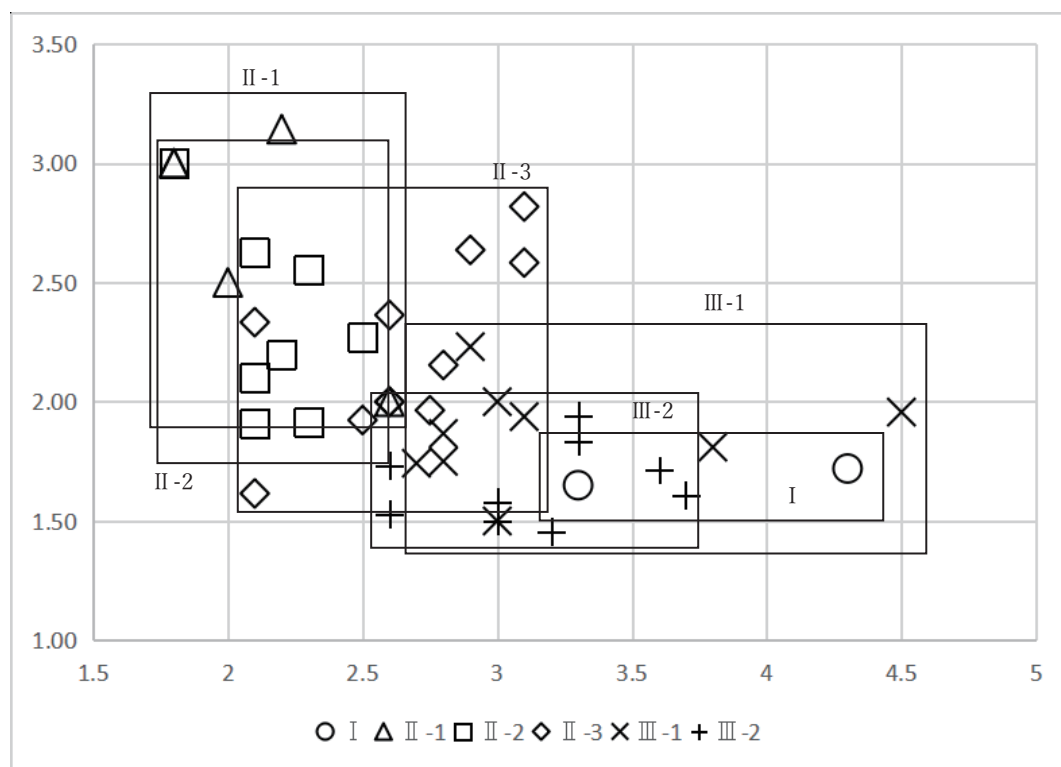


図9 各型式の縦横比と玄室長さの関係 ※縦軸は縦横比、横軸は玄室長(m)

以上の検討から各属性の共有関係と系譜をもとめると図10のようになる。最後にこれをもとに技術共有の画期と宗像型石室の成立過程を考察する。

5. 考察

(1) 宗像地域における技術共有の画期と宗像型石室の成立過程

a. 宗像地域内における技術共有

以上の検討のうち、特に各属性の共有関係を検討すると、TK47～MT15型式期に大きな画期がみられ、TK216～TK47型式期とMT15型式期以降は技術共有の様相が大きく異なる。

前者はⅠ類による横穴系埋葬施設の導入後、TK47型式期ごろには宗像地域全体へ浸透するが、階層差に規定されて墳丘・墓壇、石室平面形態等の「意匠的属性」と袖部などの「技術的属性」が明確に差別化される。この中でⅡ-2・3類の袖部にみたように、労働・

c. 玄門部と墓道（図7）

I 類は墓壙基底面と墳丘基底面あるいは段築テラス部のレベルが同一なので、傾斜墓道を採用する必要がなくすべて水平墓道である。逆にII 類では深い墓壙に規定されて傾斜墓道を採用する（花田 1991）。したがってTK216～TK47型式期では玄門・墓道自体に階層間の技術的接点を求めるのは難しく、むしろ墳丘・墓壙の築造技術に規定される。

後続するIII-1 類のうち、全長22mの前方後円墳である城ヶ谷 3 号墳では2m以上の深い墓壙を掘削して石室を構築し、墓道は水平を志向しつつ傾斜する。墳丘を調査していない首長墓の田野瀬戸 4 号墳や久原 II-3 号墳も墓道と石室の関係は城ヶ谷 3 号墳と類似するためこれと同様と考えられ、I 類の墓壙・墳丘構築技術から脱却している。こうした深い墓壙と墳丘構築自体は前代から一貫してみられる、中小古墳の影響がうかがえるものの、逆に水平墓道への志向はI 類の首長墓からの影響や、外的な要因も考えられる。

d. 墳丘と墓壙（図8）

I 類のうち、新原・奴山 1 号墳は後円部と前方部の核となる部分を盛土したのち両者を結合させるように盛土する（福岡県 1977）。盛土後に墓壙を地山整形面付近まで掘削し石室を構築しており、墳丘先行＋盛土墓壙（A 墳丘）の典型例である。勝浦峯ノ畑古墳は不明だが、16.4m付近に1 段目テラスが存在し（池ノ上 2011）、石室基底面のレベルとおおむね対応する。仮に1 段目テラスから下部が盛土主体ならば、墳丘先行＋盛土墓壙の可能性が高い。

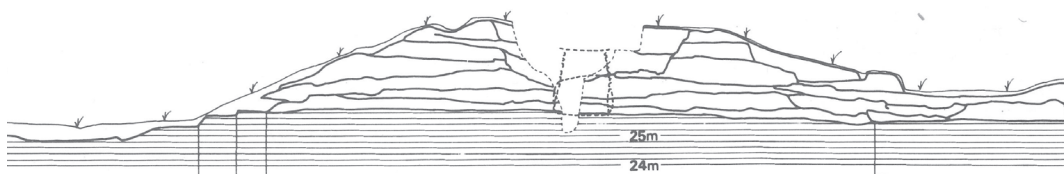
I 類の諸例は西日本的工法（青木 2018）にも通底し、横穴系埋葬施設導入直前の奴山正園古墳（円墳、径26～28m）では、墳丘構築後に穿った墓壙基底面が地山整地面に接し、新原・奴山 1 号墳例と墳丘・墓壙・主体部の関係が近似しており、伝統的な墳丘構築技術を保ちながら横穴系埋葬施設が導入されている。

これに対して中小古墳のうちII-1 類・II-2 類では、一貫して墳丘後行＋地山深墓壙を用い、前代の堅穴系埋葬施設の様相を残す。また、II-3 類も基本的に同じなので、TK216～23 型式期では階層間で墳丘構築方法が異なり、あまり共有されない。

ところが、III-1・III-2 類は前代の墳丘後行＋地山深墓壙にくわえ、墓壙が浅くなった墳丘石室同時築造＋地山浅墓壙も一定数を占めて混在する。首長墓では牟田尻片峰 E-07 号墳や、新原・奴山 4 号墳のように、これまでの墳丘先行＋盛土墓壙から墳丘石室同時築造＋地山浅墓壙にかわっており、中小古墳の地山墓壙の影響がうかがえる。

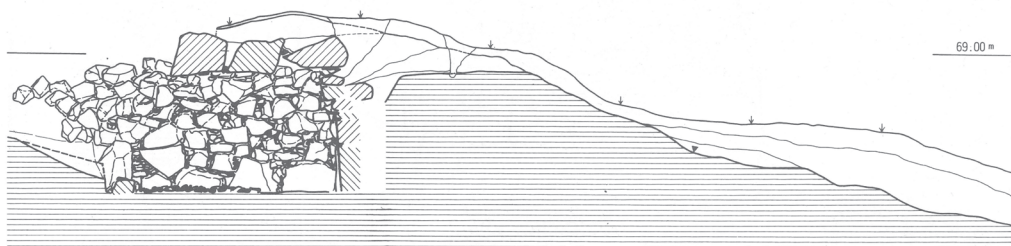
e. 平面形態（図9）

「意匠的属性」にあたる平面プランの縦横比と石室規模を図9に示した。このうちTK216～208 型式期の首長墓のI 類と、中小古墳のうち最も首長墓の属性を取り入れていないII-1 類とII-2 類は縦横比と石室規模ともに大きな隔たりがあり、両者に直接的な関係は見いだせない。II-3 類の一部は大型化して首長墓の縦横比に近いものもあるが、ばらばらに散布しており、中小古墳（II-1・2 類）と首長墓（I 類）の両者の影響が混在していると思われる。



墳丘先行+盛土墓壙（A 墳丘）

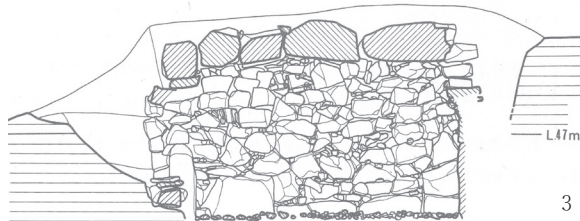
1



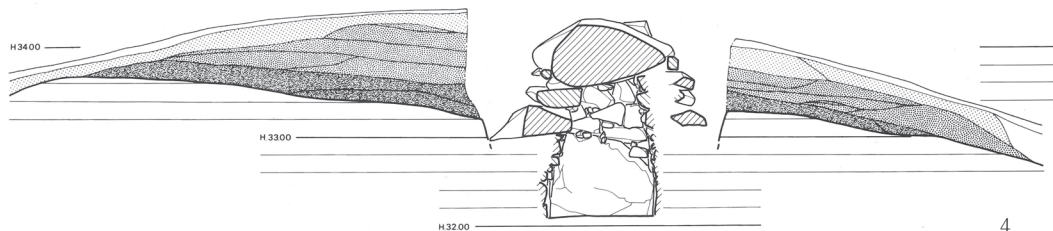
2

墳丘後行+地山深墓壙（B 墳丘）

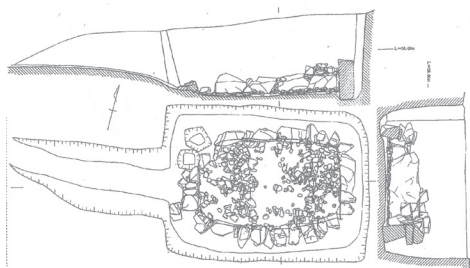
墳丘石室同時築造+地山浅墓壙（C 墳丘）



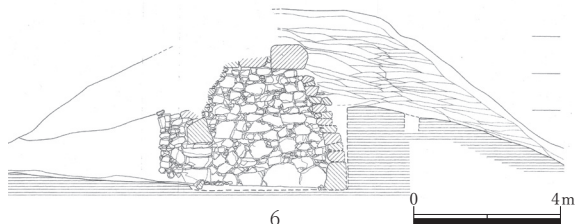
3



4



5



6

1：新原・奴山1号墳 2：王丸清勢1号墳 3：半田D-1号墳 4：相原7号墳 5：城ヶ谷3号墳 6：牟田尻片峰E-07号墳 ※各出典から転載

※スケールがないものは縮尺任意

図8 墳丘・墓壙と石室の関係

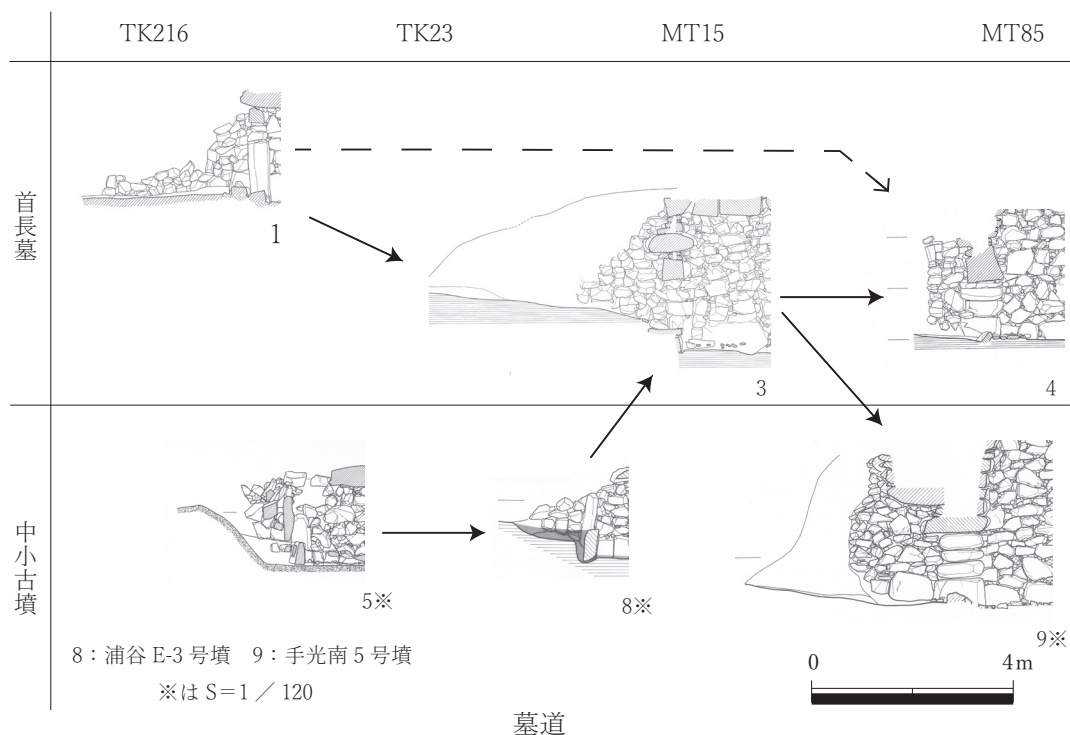
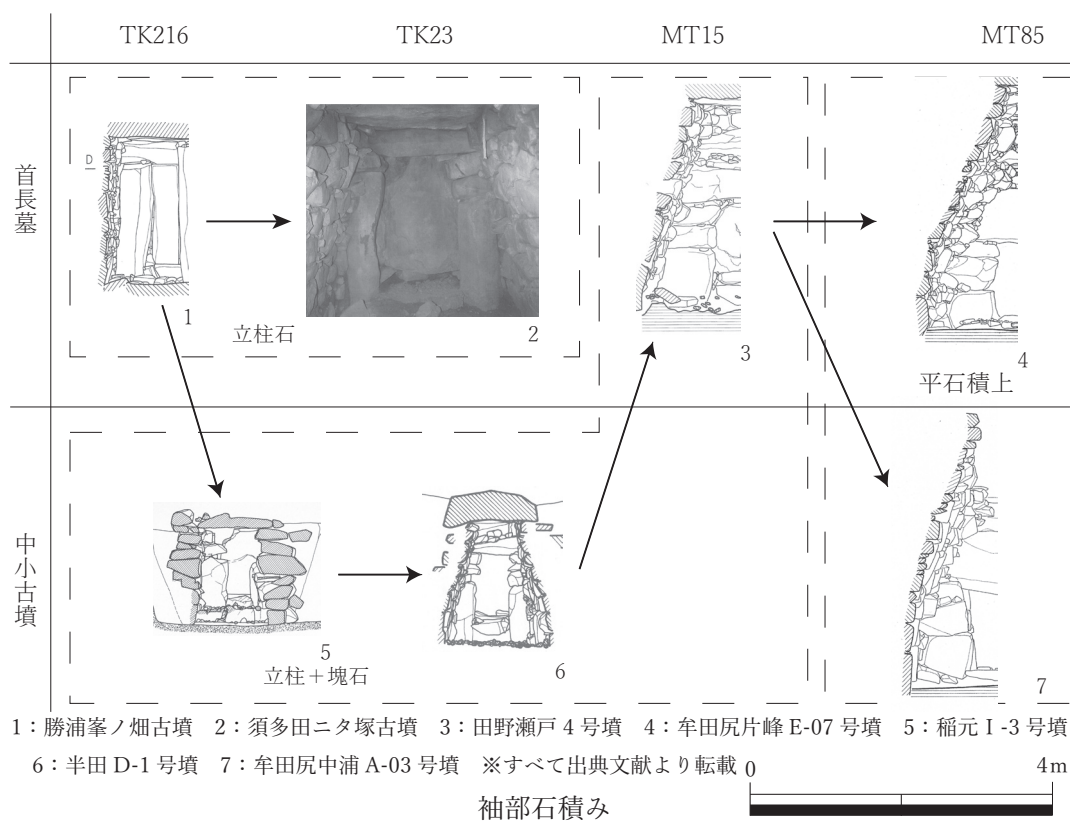


図7 各属性の技術共有

墳に採用され、Ⅰ類と思われる須多田ニタ塚古墳も直径 33.5 m の円墳で、首長の墓制である（重藤 1999 など）。一方でⅡ-1・Ⅱ-2類・Ⅱ-3類は 5～15m の円墳に採用され、比較的低い階層である。Ⅰ類とⅡ類では階層間で混在しないので、TK216～TK47 型式期では石室・墳丘は階層によって明確に規定される（蒲原 1983）。

ところがⅢ-1類とⅢ-2類のあり方は大きく異なる。前者は 10～15m の円墳と、30～40 m 台の前方後円墳に採用されるほか、後者でも 9～15m の円墳と 20～30m 台の前方後円墳に採用され、MT15 型式期以降は前代に比べ新たな型式が階層を問わず普及する。ただし、墳丘規模に応じて石室規模も変わり、規模が階層に規定される点は前代と同じである。

以上から、Ⅰ類は首長墓、Ⅱ類は中小古墳に採用され、Ⅲ-1・2類は首長墓と中小古墳の両者に採用され、階層の高さに比例して石室が大型化するといえる。

4. 石室と墳丘からみた階層間の技術共有関係と宗像型石室の成立過程

次に、先に整理した各階層での属性の共有関係をみる。

(1) 階層間における石室属性の共有関係

a. 袖部石積み（図 7）

導入期のⅠ類は立柱石である。他地域からの技術導入とされ（柳沢 1982、重藤 1999）、近隣の首長墓である須多田ニタ塚古墳（円墳、径 33.5 m）でも同じ構造なので、TK23 型式期までの首長墓を中心に採用される。

ところがⅡ-1類は腰石兼用で、これに続くⅡ-2・3類は袖部基底石に立柱石的な用石（立柱＋塊石）が普遍的にみられるため、首長墓の袖部構造を一部変容して中小古墳に採用する。

こうした中小古墳の袖部（立柱＋塊石）は後続するⅢ-1類でも続き、田野瀬戸 4 号墳や久原Ⅱ-3号墳のような首長墓でも同じ構造である。首長墓の立柱石構造が TK23 型式期ごろまで用いられる点を考えると、Ⅰ類の立柱石がⅡ-2・3類に取り入れられ、その構造がⅡ類にも引き継がれたと考えられる。

b. 楣石と前壁

Ⅰ類で既に楣石がみられ、これも他地域からの技術導入と想定されるほか、先述した須多田ニタ塚古墳でもみられ、首長墓では普遍的といえる。

一方、中小古墳での初現は半田 D-1 号墳（TK23 型式期）などのⅡ-3類で、Ⅰ類からの技術導入である。ただ、袖部の技術導入は既にⅡ-2類でみられ、袖部と楣石の技術導入に時間差があり、階層間での通時的な接触がうかがえる。その後はⅢ-1・2類でも採用され、階層を問わず普及する。

前壁の形成は現状では MT15～TK10 型式期ごろの田野瀬戸 4 号墳等のⅢ-1類だが、この時点で普及しているので、その出現は確実にさかのぼるが詳細は不明である。Ⅲ-2類でもより発展した前壁を形成させており、Ⅲ-1類からの直系的な変化が見いだせる。

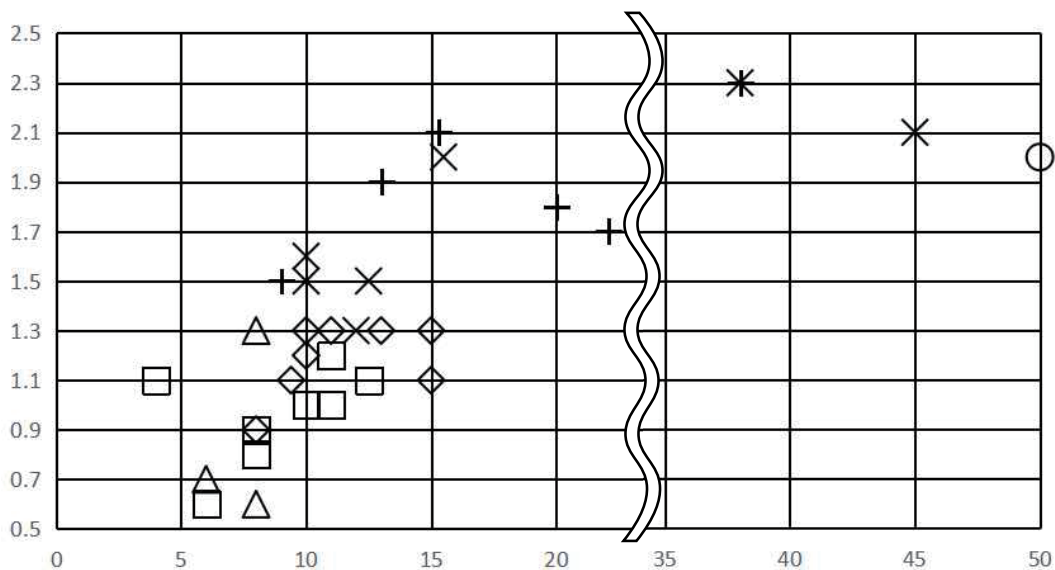
混在し、これに急・緩傾斜墓道が接続する。墳丘は墳丘後行＋地山深墓壙（B 墳丘）が多いが、墳丘石室同時築造＋地山浅墓壙（C 墳丘）もある。TK23～TK10 型式期におさまる。

Ⅲ-1 類（図 4）：両袖長方形プランの一群で、Ⅱ 類に比べて玄室幅が拡大されて、縦横比は 1.5～2.0 の間に収まる。袖部は立柱＋塊石 a・b で、楣石を架けて未発達な前壁を形成する。玄門部には段がない場合が多く、これに緩傾斜墓道が接続する。墳丘後行＋地山深墓壙（B 墳丘）と墳丘石室同時築造＋地山浅墓壙（C 墳丘）が混在し、TK 23～MT85 型式期ごろに存続する。

Ⅲ-2 類（宗像型石室）（図 5）：両袖長方形プランの一群。玄室規模はⅢ-1 類より若干大型化するが、縦横比自体はほぼ同じである。袖部は立柱＋塊石 a・b だが、MT85 型式期ではむしろ平石積上げが多い。前壁は玄門高よりも発達して、高天井である。墓道は水平が多いが、一部緩傾斜墓道もある。墳丘は石室天井部よりも浅い墓壙を形成する墳丘石室同時築造＋地山浅墓壙（C 墳丘）を用いる。TK10 か MT85 型式期には存在する。その後、TK209 型式期ごろには大半の石室で複室構造が採用されつつも（小嶋 2012）、一部でみられる。

（3）各型式と階層性の関係

古墳時代中期の階層は、重藤輝行氏による一連の研究や（重藤 1992、2016 など）、小地域内での検討も進むが（濱口 2014）、墳丘規模や石室、副葬品から論じる点は大局的に共通する。ただし、宗像地域では出土遺物が盗掘で失われているものも多いので、ひとまず墳丘規模と玄室幅、石室型式の関係を図 6 に示した。まずⅠ 類は全長 50 m 以上の前方後円



※縦軸は玄室幅（m）、横軸は墳丘直径もしくは全長（m）
○Ⅰ △Ⅱ-1 □Ⅱ-2 ◇Ⅱ-3 ×Ⅲ-1 ＋Ⅲ-2
勝浦峯ノ畑古墳（Ⅰ類）は大きすぎて表外。

図6 各型式における墳丘規模と玄室幅の関係

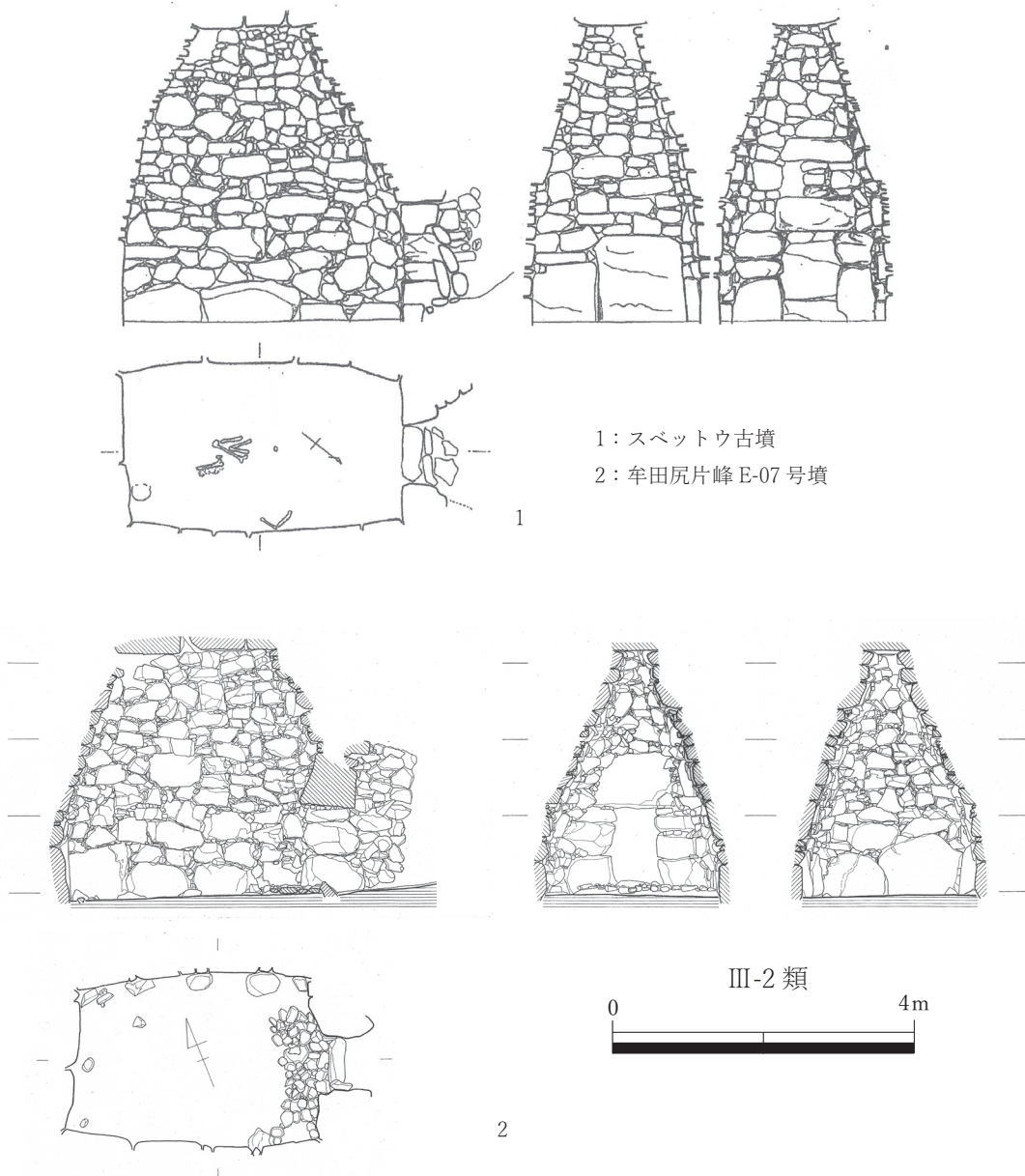
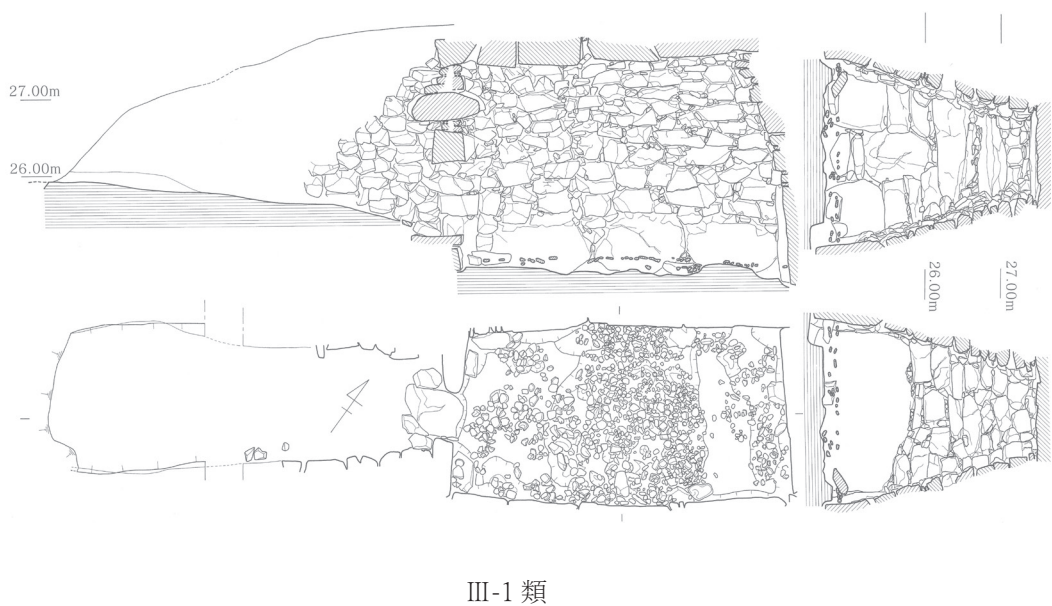
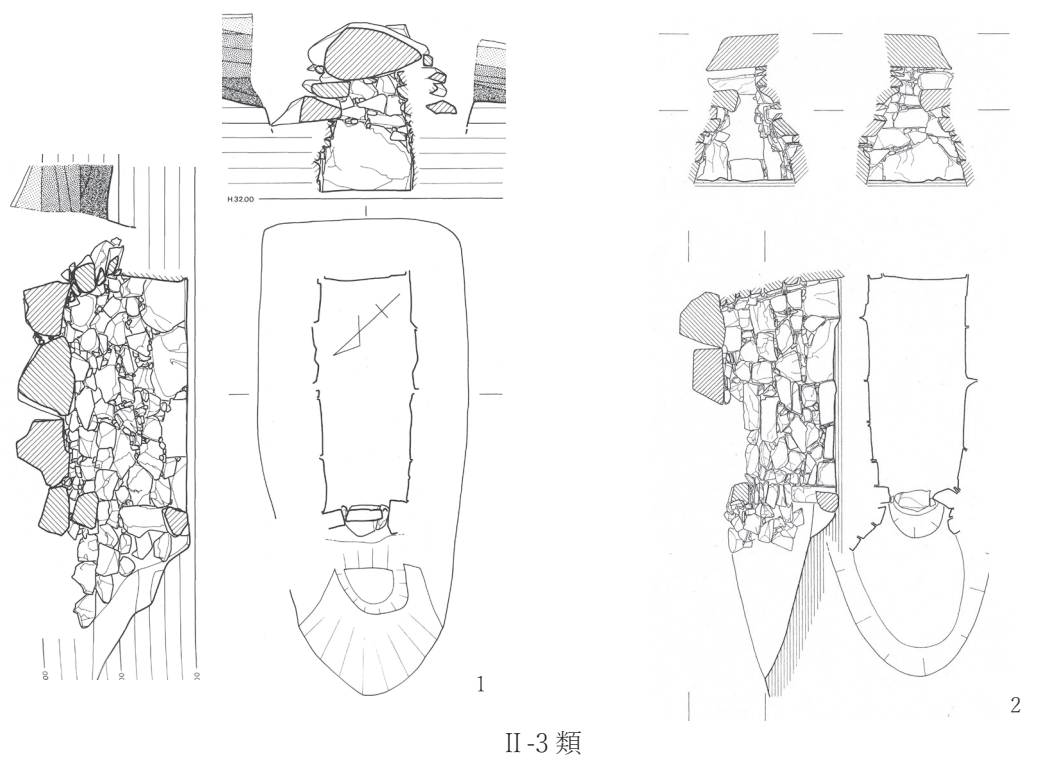


図5 宗像地域の各型式④ (S = 1/100)

Ⅱ-2 類 (図 3) : Ⅱ-1 類に比べて広い玄室幅の長方形両袖プランの一群。縦横比が 1.9 から 2.5 のものが多く、天井高も 1m を超える。袖部は立柱 + 塊石 b が多く、玄門部に段を設けて急・緩傾斜墓道が接続し、墳丘後行 + 地山深墓壙 (B 墳丘) である。TK208 型式期には存在するが、TK23 ~ TK47 型式期に多い。

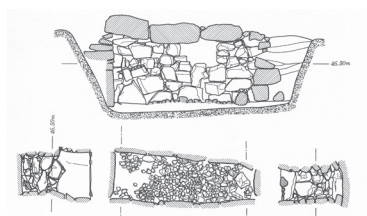
Ⅱ-3 類 (図 4) : 長方形両袖タイプで、Ⅱ-2 類に比べて玄室が若干拡大する反面、縦横比はほぼ同じである。天井高も 1.5m と高い。袖部はⅡ-2 類と同じで立柱 + 塊石 b が多く、楣石を用いて高天井化を志向するが、前壁はない。玄門部は有段と無段が



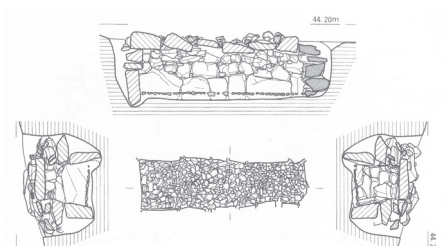
1：相原7号墳 2：牟田尻新開A-20号墳 3：田野瀬戸4号墳 ※すべて出典から転載



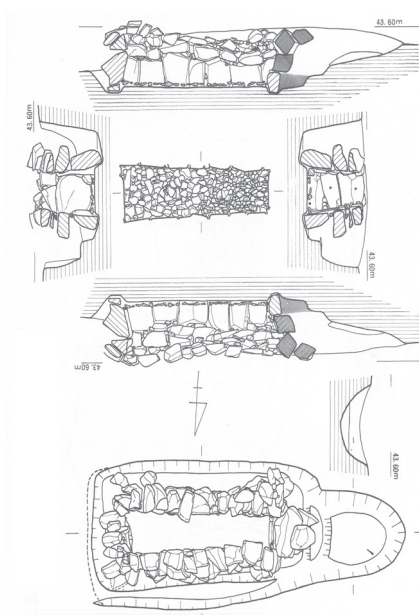
図4 宗像地域の各型式③ (S = 1/100)



1

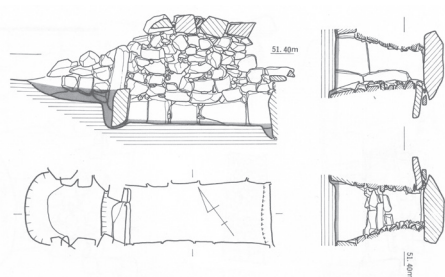


2

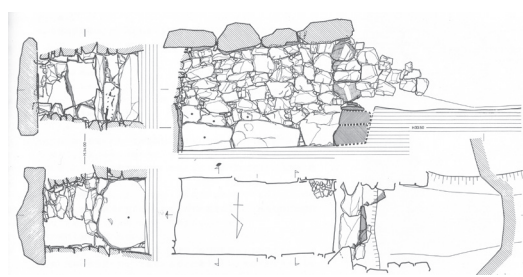


3

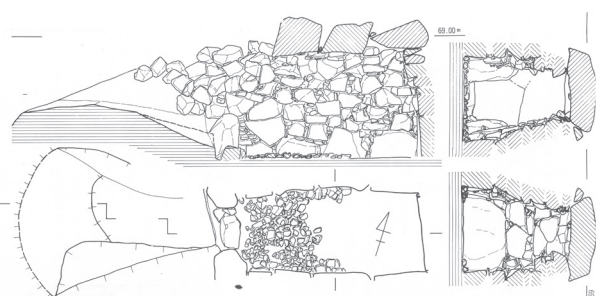
II-1 類



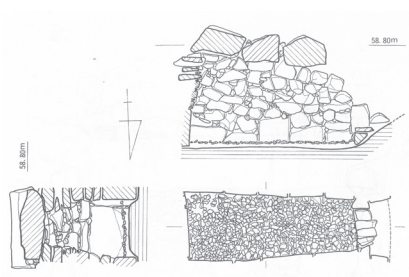
4



5



6



7

II-2 類



1：稲元 I-2 号墳 2：浦谷 C-1 号墳 3：浦谷 A-3 号墳 4：浦谷 E-3 号墳 5：久戸 10 号墳 6：王丸清勢 1号墳 7：浦谷 C-4 号墳 ※すべて出典文献から転載

図3 宗像地域の各型式② (S = 1/100)

(2) 型式の設定と時期比定

今回の対象資料を表1に示したが、各属性の相関関係から、次のような型式が設定できる。

I類(図2)：宗像地域での初期石室群で、両袖長方形プランの一群。また、玄門部は水平墓道である。袖部は立柱石で構成し、上部に楣石を架構する。墳丘および墓壇は新原・奴山1号古墳の状況から墳丘先行+盛土墓壇(A墳丘)と考えられる。TK216～208型式期の首長墓に採用されるほか、玄門構造からI類と想定される須多田ニタ塚古墳の存在からTK23型式期まで存続した可能性がある。

II-1類(図3)：縦横比が2.0～3.0付近の無袖の縦長長方形プランの一群で、著しく天井が低い。玄門部は腰石兼用で、楣石と前壁はない。墓道は傾斜が急で、墳丘後行+地山深墓壇(B墳丘)である。出土遺物がなく時期比定が困難だが、さらに発展したII-2類がTK208型式期にはあるため、この頃には存在する。

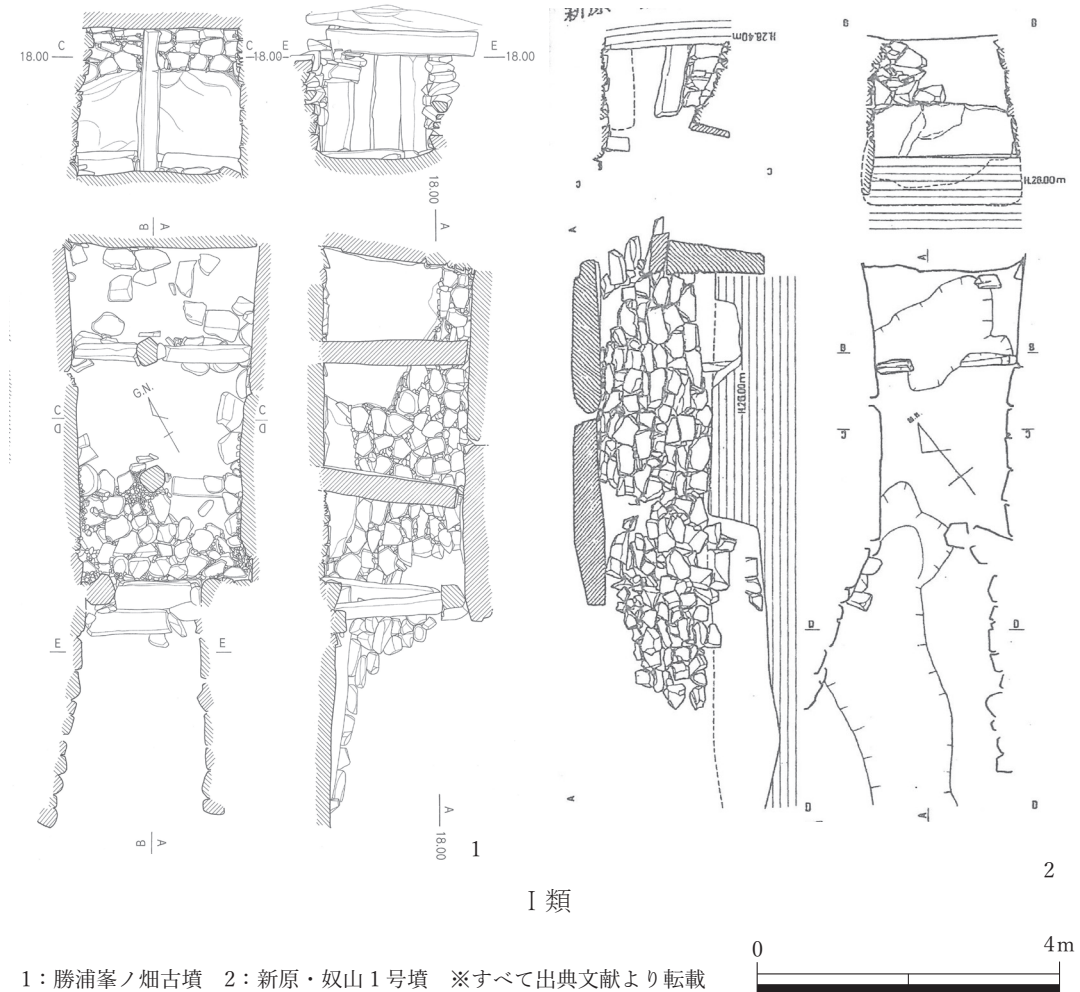


図2 宗像地域の各型式① (S = 1/100)

表1 つづき

楣石と前壁	玄門段	墓道	石室と墳丘の関係	参考文献
楣石有＋前壁無	無	水平	墳丘先行＋盛土墓壇	福岡県 1977-54
楣石有＋前壁無	無	水平	墳丘先行＋盛土墓壇	福津市 2011-4
楣石無	有	緩	墳丘後行＋地山深墓壇	宗像市 1982-5
楣石無	?	急	墳丘後行＋地山深墓壇	
楣石無	?	急	墳丘後行＋地山深墓壇	稲元古墳群調査団 1976
楣石無	有	急	墳丘後行＋地山深墓壇	
楣石無	段なし	急	墳丘後行＋地山深墓壇	宗像市 1990-25
?	有	緩	墳丘後行＋地山深墓壇	宗像市 1991-33
楣石無	有	急	?	宗像市 1982-5
楣石無	有	?	墳丘後行＋地山深墓壇	
楣石無	有	緩	墳丘後行＋地山深墓壇	稲元古墳群調査団 1976
楣石無	有	急	墳丘後行＋地山深墓壇	
楣石無	有	水平	墳丘後行＋地山深墓壇	宗像町 1979-2
楣石無	無	急	墳丘後行＋地山深墓壇	宗像市 1990-25
楣石無	有	緩	墳丘後行＋地山深墓壇	
楣石有＋前壁無	無	緩	墳丘後行＋地山深墓壇	宗像市 2013-62
楣石有＋前壁無	有	急	墳丘後行＋地山深墓壇	宗像町 1979-1
楣石有＋前壁無	有	急	墳丘石室同時築造＋地山浅墓壇	
楣石有＋前壁無	有	急	墳丘後行＋地山深墓壇	宗像市 1983-6
楣石有＋前壁無	有	緩	墳丘後行＋地山深墓壇	クボタハウスほか 1977
?	無	?	墳丘石室同時築造＋地山浅墓壇	宗像考古学研究会 2017
楣石有＋前壁無	無	緩	墳丘後行＋地山深墓壇	宗像市 1988-18
楣石有＋前壁無	有	緩	墳丘後行＋地山深墓壇	—
楣石有＋前壁無	無	緩	墳丘石室同時築造＋地山浅墓壇	—
楣石有＋前壁無	無	急	?	—
楣石有＋前壁未発達	有	緩	?	九州前方後円墳研究会 1999
楣石有＋前壁未発達	無	緩	墳丘後行＋地山深墓壇	宗像市 1982-5
楣石有＋前壁無	無	緩	墳丘後行＋地山深墓壇	宗像町 1979-2
楣石有＋前壁未発達	有	緩	墳丘石室同時築造＋地山浅墓壇	クボタハウスほか 1977
楣石有＋前壁未発達	有	水平	墳丘石室同時築造＋地山浅墓壇	宗像市 2007-59
楣石有＋前壁未発達	無	緩	?	宗像考古学研究会 2017
楣石有＋前壁未発達	無	緩	?	九州前方後円墳研究会 1999
楣石有＋前壁未発達	無	緩	墳丘後行＋地山深墓壇	宗像町 1979『相原古墳群』1集
?	無	急	墳丘後行＋地山深墓壇	宗像考古研究会 2017
楣石有＋前壁未発達	無	緩	墳丘後行＋地山深墓壇	
楣石有＋前壁発達	無	?	墳丘石室同時築造＋地山浅墓壇	
楣石有＋前壁発達	無	?	?	
楣石有＋前壁発達	無	水平	?	九州前方後円墳研究会 1999
楣石有＋前壁発達	無	緩	?	クボタハウスほか 1977
?	無	水平	墳丘石室同時築造＋地山浅墓壇	津屋崎町 1989－6
楣石有＋前壁発達	無	水平	墳丘石室同時築造＋地山浅墓壇	
楣石有＋前壁発達	無	?	?	—
楣石有＋前壁発達	無	水平	?	宗像考古研究会 2017
楣石有＋前壁発達	無	水平	?	福岡町 1981-1

表1 分析資料一覧

遺跡名	墳丘形態／規模 (m)	大別	型式	時期	縦	横	高	袖部の積み方
新原・奴山 1 号墳	前方後円 50	I		TK208	3.3	2	1.6	立柱
勝浦峯／畑古墳	前方後円 100	I		TK216	4.3	2.5	1.9	立柱
浦谷 A-3 号墳	?	II	1 類	?	2	0.8	?	腰石兼用
浦谷 C-1 号墳	円 6	II	1 類	?	2.2	0.7	0.7	腰石兼用
稲元 I -2 号墳	円 8	II	1 類	?	1.8	0.6	0.9	腰石兼用
稲元 I -1 号墳	円 8	II	1 類	?	2.6	1.3	?	腰石兼用
富地原梅木 8 号墳	円 4 ～ 8	II	1 類	TK208 ～ TK23	1.8	0.6	?	腰石兼用
王丸清勢 1 号墳	円 11 ～ 14	II	2 類	TK23 ～ TK47	2.5	1.1	1.4	立柱＋塊石 b
浦谷 C-4 号墳	円 8	II	2 類	?	2.3	0.9	1.1	立柱＋塊石 a
浦谷 E-3 号墳	円 8	II	2 類	?	2.1	0.8	1.2	立柱
浦谷 I-1 号墳	円 10 ～ 12	II	2 類	?	2.1	1	1.3	腰石兼用
稲元 I -3 号墳	円 11	II	2 類	TK216 ～ 208	2.3	1.2	1.2	立柱＋塊石 a
久戸 10 号墳	円 10	II	2 類	?	2.2	1	1.3	立柱＋塊石 b
富地原梅木 8 号墳	円 4 ～ 8	II	2 類	TK208 ～ TK23	1.8	0.6	?	腰石兼用
富地原梅木 11 号墳	円 4	II	2 類	?	2.1	1.1	1.4	立柱＋塊石 b
朝町竹重 S0120	円 8	II	3 類	TK47 ～ MT15	2.1	0.9	?	立柱＋塊石 b
相原 6 号墳	円 9.4	II	3 類	?	3.1	1.1	?	腰石兼用
相原 7 号墳	円 10	II	3 類	?	3.1	1.2	1.5	立柱＋塊石 a
半田 D-1 号墳	円 15 ～ 16	II	3 類	TK23 ～ 47	2.9	1.1	1.6	立柱＋塊石 a
城ヶ谷 19 号墳 1 号石室	円 12 ～ 13.5	II	3 類	?	2.6	1.3	1.6	立柱＋塊石 a
牟田尻桜京 A-06 号墳	円 15	II	3 類?	TK23	2.5	1.3	?	?
名残長浦 2 号墳	円 10	II	3 類	?	2.1	1.3	?	腰石兼用
牟田尻新開 A - 20 号墳	?	II	3 類	?	2.8	1.3	1.5	立柱＋塊石 b
牟田尻片峰 E-05 号墳	?	II	3 類	?	2.75	1.4	1.7	立柱＋塊石 a
牟田尻下浦 9 号墳	?	II	3 類	?	2.6	1.1	?	立柱＋塊石 b
久原 II -8 号墳	円 11	II	3 類	?	2.6	1.3	?	腰石兼用
浦谷 C-5 号墳	円 10	III	1 類	TK47 ～ MT15	2.8	1.5	?	立柱＋塊石 b
久戸 11 号墳	円 12	III	1 類	TK23 ～ 47	2.9	1.3	1.7	立柱＋塊石 b
城ヶ谷 19 号墳 2 号石室	円 12 ～ 13.5	III	1 類	TK10 ～ MT85	3	1.5	?	立柱＋塊石 b
田野瀬戸 4 号墳	前方後円 38	III	1 類	TK10	4.5	2.3	2.8	立柱＋塊石 a
久原 II -3 号墳	前方後円 45	III	1 類	MT15 ～ TK10	3.8	2.1	2.7	立柱＋塊石 b
久原 IV -1 号墳	円 14 ～ 17	III	1 類	?	3	2	3.2	立柱＋塊石 a
相原 4 号墳	円 10	III	1 類	MT85	2.8	1.6	?	立柱＋塊石 a
牟田尻桜京 A-03 号墳	?	III	1 類	?	3.1	1.6	?	立柱＋塊石 a
牟田尻下浦 11 号墳	?	III	1 類	?	2.7	1.55	?	立柱＋塊石 a
牟田尻片峰 E-07 号墳	前方後円 20	III	2 類	MT85 ～ TK43	3.3	1.8	3.2	平石積上
スベットウ古墳	前方後円 35 ～ 40	III	2 類	TK10	3.7	2.3	3.9	立柱＋塊石 b
久原 II -21 号墳	円 22.1	III	2 類	?	3.3	1.7	?	立柱＋塊石 b
城ヶ谷 15 号墳	円 9	III	2 類	TK10 ～ MT85	2.6	1.5	2.6	立柱＋塊石 b
新原奴山 4 号墳	円 15.3	III	2 類	MT85	3.6	2.1	?	平石積上
新原奴山 5 号墳	円 13	III	2 類	MT85	3	1.9	3	立柱＋塊石 b
牟田尻片峰 E-02 号墳	?	III	2 類	?	2.6	1.7	2.7	平石積上
牟田尻中浦 A-03 号墳	円 13	III	2 類	TK43	3.2	2.2	3.5	平石積上
手光南 5 号墳	円 19	III	2 類	MT85	3	2	3.5	平石積上

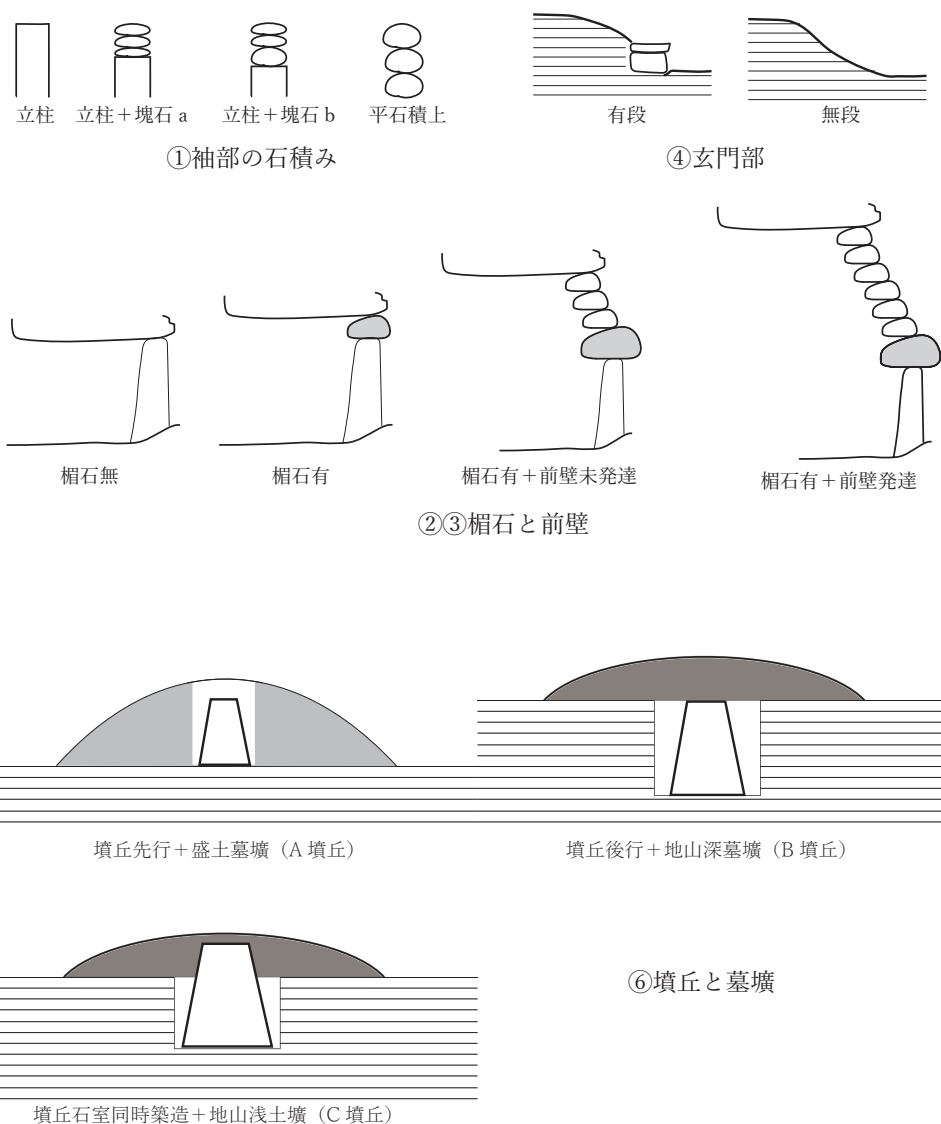


図1 各属性の分類

- ③前壁の形成 前壁有と前壁無がある。さらに前壁有の場合、玄門高以下しかないもの（前壁未発達）と玄門高以上のもの（前壁発達）に細分される。
- ④玄門部 段を形成して墓道に接続するものと（有段）、段がなくそのまま墓道に接続するもの（無段）がある。
- ⑤墓道 急傾斜、緩傾斜、水平に分かれる。
- ⑥墳丘と墓壙 先に墳丘を築造したのち盛土を掘削して墓壙を形成し、石室を構築する墳丘先行+盛土墓壙（A 墳丘）、地山整形後に石室高ほどの墓壙を穿ち石室をつくり、薄く盛土する墳丘後行+地山深墓壙（B 墳丘）、地山整形後に石室高よりも浅い墓壙を掘削し、石室上部と墳丘を同時に構築する墳丘石室同時築造+地山浅墓壙（C 墳丘）に分かれる。

また、宗像型石室の系譜を、田野瀬戸4号墳のような石室構造に求め、「宗像郡在来の石室構築技術を軸に新来の技術・思想を取り込みながら変遷する石室群」とした（小嶋 2015）。

ただし、前代の在来型式は花田氏や原氏らの検討以降アップデートされておらず、当時の研究傾向もあって石室構造の検討が中心で、墳丘等も加えた様相解明が必要である。さらに最近では階層差と石室構造の問題（重藤 1992 など）や、中小古墳被葬者による労働・奉仕を通じた横穴系埋葬施設の導入など（重藤 2016、大谷 2017 など）、石室構造のローカル化に関する実態は複雑で、石室構造が階層ごとでどのように変化したか見定める必要もある。

(2) 本稿の目的と方法

以上から、本稿ではまず古墳時代中期の宗像地域における石室墳丘構造の整理と各階層による属性の共有関係を検討し、宗像型石室がどのように形成されたかを検討する。

検討では、太田宏明氏や小嶋氏の視点を参考に、古墳の諸属性を石室の空間デザインにあたる「意匠的属性」と、これを実現させるための「技術的属性」に分けて分類し（太田 2016、小嶋 2015）、各々の相関から型式を設定後、時期、各階層との関係を整理する。また、その上で技術的属性の階層間での技術共有関係を明らかにし、宗像型石室の成立過程を論じる。

3. 宗像地域における古墳時代中期から後期前半の石室・墳丘の型式学的検討

(1) 各属性の分類（図 1）

a. 意匠的属性の分類 重藤 1999 を参考に、平面形態を以下のように分類しておく。

I 類（初期横穴式石室 A 類）：両袖、板石閉塞、長方形の玄室平面を基本とし、羨道が発達しない玄室幅 1.4m 以上の大型の初期横穴式石室群。

II 類（初期横穴式石室 B 類または縦穴系横口式石室）：板石閉塞、長方形の玄室平面をもち、羨道は発達しない。玄室幅 1.4m 以下と小型の一群。

III 類（単室無羨道横穴式石室）：羨道のない両袖の横穴式石室で I 類以外のもの。前壁を形成し、矩形が多い。

b. 技術的属性の分類 本稿では、最も峻別しやすい①袖部の石積み ②楣石 ③前壁の形成 ④玄門部 ⑤墓道 ⑥墳丘と墓壇のそれぞれを分類した。

①袖部の石積み 側壁腰石をそのまま利用するもの（腰石兼用）、平石の積上げで袖を形成するもの（平石積上げ）、基底部に立柱石＋上部に塊石の組み合わせ（立柱＋塊石）がある。さらに立柱＋塊石では、袖部基底石が玄門高の半分以上のもの（立柱＋塊石 a）と半分以下のもの（立柱＋塊石 b）に細分できる。

②楣石 楣石有のものと楣石無がみられる。

《論文》

いわゆる「宗像型横穴式石室」の成立過程

太田 智

1. はじめに

最近の古墳時代後期の横穴式石室研究は、平野単位で地域性の把握が進み、本稿で対象とする宗像地域でも「宗像型横穴式石室」（以下、宗像型石室とする）として広く認識される。ただし、こうした後期の地域型式の成立過程については議論が途上で、検討に不可欠な中期の検討も後期に比して低調な感をうける。首長を中心とした労働・奉仕の関係（重藤 2016 など）からみると、首長墓から一方的に派生したという理解へ進む前に、地域性発現前代の様相の解明が不可欠である。

以上を踏まえ、本稿では 6 世紀後半に出現する宗像型石室について、中期の墳丘と石室構造の整理を踏まえ、その出現過程を追う。

2. 問題の所在、本稿の目的、方法

(1) 宗像地域における問題の所在

宗像地域では 1960 年代から古墳群の調査例が蓄積され、早い段階で石室編年や古墳群の形成過程等が検討され（原 1982、安部 1985）、最近でも豊崎晃史氏が検討している（豊崎 2020）。同時に首長墓の調査も進み（福岡県 1977 など）、勝浦峯ノ畑古墳の玄室内石柱と高句麗古墳との類似性や（佐田ほか 1999 など）、新原・奴山 1 号墳や勝浦井ノ浦古墳の石室構造の系譜が指摘されると同時に（森下 1986 など）、これらの石室構造に地域性が見出されたが（柳沢 1982）、これらは後に「既存の北部九州型横穴式石室の構築技術と、新たに朝鮮半島から伝播した横穴式石室の構築技術が共存」という指摘に結実する（重藤 1999）。

一方で首長墓も含めた体系的な石室編年研究も進む。花田勝広氏は堅穴系横口式石室と、これに類似しつつ玄室が大型化した堅穴系横穴式石室に分類し編年案を提示するほか（花田 1991）、田村悟氏は後期の地域型式として「スベットウタイプ」を設定し、その特徴を論じる（田村 1999）。重藤輝行氏は北部九州を概観する中で他地域に比べ古い様相が残しつつ、高天井化などの新たな要素が混在することを示唆する（重藤 1999）。小嶋篤氏はこれらを発展させて①楣石上面よりも深い墓壇、②両袖で、袖石は扁平石材の平積みを多用、③壁面高に比して腰石が相対的に低いほか、レンガ積みや平積みを多用し、横目地が頻繁に通る、④合掌形の石室横断形をもつ、⑤両袖単室短羨道石室 I 類の採用率が高い石室を「宗像型」と呼称した（小嶋 2009・2012・2015 など）。